

カトリック 仙台教区報

2006年5月21日 No.169

発行
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

ステファノ・マリア 舟山 亨 新司祭 誕生 平賀司教、初の司祭叙階

昨年3月、岡田武夫大司教によって助祭に叙階された舟山亨師の司祭叙階式が、5月3日(水)カテドラル(元寺小路教会)で挙行された。

司式した平賀司教にとっては、司教となつて初の司祭叙階式とあつて喜びもひとしお、終始笑顔がこぼれていた。

叙階式は、聖堂を埋め尽くした信徒たちの入祭の歌、新しい歌を主に歌えが響き渡る中で始まった。ピタウ大司教はじめ、他教区から祝福に来てくださった司祭と仙台教区司祭団が壇上に並んだ。

平賀司教は司教訓話の中で、「今日、舟山亨さんは、自分の全人生をかけて、キリストの呼びかけに対して、『はい!』と答えるわけです。」

先ほど読まれた福音の中に、『あなたがたが私を選んだのではない、私があるがたを選んだのである』というキリストの言葉があります。私たちは人間の側からは、自分の意思として決定してきたように思いますが、信仰の目で見ますと、神様は私たちの自由意志を大事にしながら、イエス様が先にあれやこれやと準備してくださいといたという事に思いあたります。

あなた自身が喜びをもって受け入れた神のことはを、すべての人に分け与えて下さい。



叙階された舟山新司祭は、ミサの終わりに参列者に向かって、「司祭になつて、皆様から

尊敬されるような立場になつたのかもしれませんが、私自身は何か大きく変わったわけではありませぬ。前も舟山亨です、今も舟山亨です。自然体で、自分自身を出し切つて奉仕職を務めていきたいと思つています。頼りない私ですがよろしくお願ひいたします。」と挨拶し、参列者から大きな祝福の拍手

を浴びた。なお、平賀司教から、青森県浪打教会と本町教会の助任司祭として派遣されることが発表された。

叙階を受けて 舟山 亨

5月3日。新司祭としての新しい歩みが始まりました。

2000年に神学校に入學したときは36歳。そして、神学校を卒業したのが42歳。新司祭といつても世間で言えば立派な中年で、会社の中でもエンジンの役割として組織をぐいぐい引っ張つて行かなくてはならない世代であります。車で言えば車検の終わった中古車といったところでしょうか。「叙階されたばかりの新司祭なので」とは、いつまでも言えません。しかし、どんな仕事でも部署が変われば最初から1年生として始めなくてはならないので、これから皆様のご指導をいただきながら善き司祭として歩んでいきたいと思つています。ここで言う善き司祭というのは、人間の善さはもちろんのこと、靈的に善い司祭とならなくてはいけないでしょう。日々祈りの中、信仰を生きる者として、白い雲がフワツとわき上がるような喜びを抱えながら、信仰を証していきたいと思つています。ぎこちないこの新司祭のためにどうかお祈りください。

塩と光

主の過越の神秘を、共に祝つたわたしたちは、実は自分自身も過越の体験ができません。そもそも主の復活の出来事を、過越として受け止めるのは何故ですか。確かに旧約時代から祝われて来た過越祭は、イスラエルのエジプトからの解放という偉大な救いの出来事を記念するものでした。この過越祭で屠られるのが小羊でしたが、わたしたちのためには、「キリストが、わたしたちの過越の小羊としてほふられたからです」(1コリント5:7) この「過越」という言葉は、羊の血を見たら、神が「過ぎ越す」(出エジプト12:13)ことを表すものでした。けれども、イエスが死からいのちへと過ぎ越された出来事を祝うことによつて、まさにこの「過越」がより豊かな救いの出来事に深められたのです。さらにこの「過越」は、洗礼の恵みにまで及ぶ出来事となりました。「わたしたちは洗礼によつてキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によつて死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです」(ロマ6:4)。(博)

6教会合同で復活徹夜祭を祝う

仙台中央地区で15名が受洗

仙台中央地区6教会合同の復活徹夜祭が、4月15日(土)午後7時から平賀徹夫司教主司式のもとに行われた。これは、共同宣教師牧になって初めての試みである。

初めに、聖堂前のテラスで、「光の祭儀」が行われ、復活のロソクを高くかかげた舟山助祭が、「キリストの光」と歌いながら聖堂に入ると、手に手にロソクの光を持った信徒たちの長い行列が続いた『写真』。

ミサの中で、15人の洗礼志願者が洗礼と堅信の秘跡を受けた。平賀司教は、説教の中で、「こ

の復活徹夜祭に教会は、神のいのちに新しく生まれ変わる兄弟、公に『神の子』としてこの共同体に



加わる人たちを迎えます。

世のあがないのために全部をささげつくしてください、死んでくださったイエスさまと結ばれ、今までの肉の生き方や罪をおかす生き方に死んで、新しく『神の

いのちに生きる者』として生まれ変わる、それが洗礼の意味です。『十字架につけられて死んだイエスさまは、復活なさった。』そ

れは、わたしたちの信仰の一番の中心です。復活のキリストにしっかりと結ばれて新しいいのちを生きるように、洗礼をおとして、わたしたちはすでに新しいいのち、復活のいのちにあずかる者としていただいた、洗礼は、そうしていただいたという喜びをもちます。

洗礼式に続いて『堅信の秘跡』

が授けられます。そこで象徴される、『神の愛そのものである聖霊』が注がれて、神さまはわたしを導いてくださるのです。

わたしたちは、『光の子として生きる者』となります。『何が主に喜ばれることか、それを吟味しながら』、それを選びとっていく生き方です。

きょう、復活徹夜祭にあたり、すでに聖霊の導きの喜びを味わっているわたしたちも、共同体に新しく加わる人たちと心をひとつにして、心から、神に賛美と感謝をささげていきたいと思えます。』と、洗礼を受けることの喜びについて話された。



ミサ中の「信仰宣言」について

司教 平賀 徹夫

日本の司教団はいま「ミサ典礼書」の改訂作業をおこなっていて、ここ一、二年のうちにも、バチカンの認証を得た新しい「改訂ミサ典礼書」が発表されるだろうと思います。

この改訂作業中、2004年2月の臨時司教総会で、口語文の「ニケア・コンスタンチノーブル信条」と「使徒信条」が確定しました。この信条を印刷したカードは2004年中に、教区報の部数に準じた枚数で、各小教区に送られています。今後、典礼の場では改訂口語文の信条を唱えることとなります。

現在たぶん多くの教会でミサ中に唱えられている「洗礼式のときの信仰宣言」は、将来的には普段のミサでは使わないこととなりますので、いまから口語文の「ニケア・コンスタンチノーブル信条」または「使徒信条」に慣れておくのがよいと思います。ミサでの「信仰宣言」やロザリオの祈りなどで唱えるようにすることをお勧めいたします。

ミサ典礼書のラテン語規範版では、通常は「ニケア・コンスタンチノーブル信条」を用い、四旬節・復活節には「使徒信条」を用いることができます。日本のミサ典礼書改訂案では、この両方をいつでも使えるように考えています。



青年たちの手作りストラを送られて・・・



司教と共にミサを・・・



諸聖人の連願



叙階式ミニアルバム

舟山師のご家族

仙台司教区活性化研修会

今年も教区活性化のための研修会が、各地で開催された。主催は「仙台教区宣教司牧を考える会」で、共通テーマは、「教会にいのちを与える聖体(エウカリスティア)」である。今回は仙台と盛岡で行われた研修会を紹介する。

【仙台】

3月12日(日)午後2時から、元寺小路教会で、「カトリック仙台司教区活性化のための研修会」が開催され、約100人の参加者が「教会にいのちを与える聖体」というテーマで話された小野寺師の講話に熱心に耳を傾けた。

＝写真＝

まず、宮城県代議員代表者の伊藤雄基氏より、これまで回を重ねて4回を迎えた「活性化研修会」は、例年と異なり、1県1カ所の会場ではなく、宮城県では県南、県北、仙塩地区の3カ所で、同時に開催されているという紹介の挨拶がなされた。次いで、講師の小野寺師は、「昨年1年間を『エウカリスティアの年』として過ごしてきた。仙台教区で働く司祭たち約40名は『エウカリスティ

ア』についての研修会に参加した。今回は、その研修会の分かち合いを信徒の皆さまにしたい」と前置



きし、左のような講話があった。

「私たちは各々、所属小教区でミサにあずかってきたが、このミサは、初代教会から『エウカリスティア・感謝の祭儀』と呼ばれ、信徒が集い、共に食事をし、共に話し合っていたことを指している。したがって、ミサには奉獻礼拝などが含まれている。私たちは、ミサを狭い意味でとらえないようにしよう。」

私たちに恵みを与える秘跡は、すべて聖体の秘跡を頂点とし、源としている。聖体の秘跡は『慈しみの秘跡』『愛のしるし』『愛の

絆』復活の祝宴』とも言われる。

私たちは、『ご聖体』と簡単に言っているが、『ご聖体』と『ご聖体拝領』を分けて考える必要がある。『聖体拝領はラテン語で『コムニオ』と言つが、これは、『交わり』と訳される言葉で、聖体をいただき、キリストにおいて兄弟姉妹と一致することを意味している。

ミサと日常生活は、響き合つものである。私たちが出会っているさまざまな苦しみは、ミサの中で奉獻されるものである。『現代世界憲章』の冒頭にあるように『現代人の喜びと苦しみ』など、地上のものを天上に取り次ぐ使命は、私たち信者に課せられているものである。このことを『在俗性』と表現するならば、『在俗性』は教会の特徴である。

コムニオによって、私たちは『キリストのからだ』を建設している。教会が感謝の祭儀を祝つことは、教会を造ることもである。典礼が、そのまま教会の現実を反映している。貧しい人を意識しているミサになっているだろうか。キリストは罪人と会食をする障がい者の友となる。ミサでこのようなことが意識されているだろうか。

私たちがミサに参加することは、キリストの祭司職にあずかることであり、預言職、王職に参与することなのである。」

休憩の後、ミサは、信者生活の中心であり、大切なものなので、熱心な質疑応答が展開され、実り多い研修会を終えた。

【盛岡】

岩手県研修会は、2月12日(日)四ツ家教会で講師に横島健二師(大船渡教会主任)を迎えて行われた。

横島師は「教会に命を与える聖体」と題して、仙台教区司祭研修会(講師、カンペンハウド師)の資料とその記事が掲載された「教区報167号」のコピーを配り講演された。

「聖霊来たり給え」と言えば、どこからかふわふわと飛んでくるのですか？

神父が聖変化の祈りをすれば、本当に二千年前のキリストが現れるのですか？

また、後半では、「『ミサで神様にやってもらいたいことを山ほど持つて来て、献金して頼んでいませんか？

『聖霊来たり給え』と言えば、どこからかふわふわと飛んでくるのですか？」と問いかけながら、秘跡は摩訶不思議な魔術的なものではないと警告を交えて秘跡の本質を理解することの大切さについて話された。講演を聞いて、キリストと共に歩む新しいエネルギーと勇気をいただくことが出来た思いがした。

た。(久慈教会・高橋和郎)



第4回 仙台教区宣教司牧を考える会

3月21日(火) 11時から仙台司教区センター2階会議室で代議員会が開催された。平賀司教をはじめ、司祭5名、各県代表の信徒7名、修道女2名が出席した。

冒頭、平賀司教は「司教は教区のビジョンを示して欲しいという声が聞こえてくるが、私としては、皆さんのご意見や考えを聞きながら歩んで行くことが出来ればと思っている。ケ

ネデイ大統領が就任演説の中で述べた有名な一節『あなた方は国家があなた方に何を与えてくれるかではなく、あなた方が国家に何が出来るかを求めて欲しい』の通り、信徒の皆さんも、司教が教区民のために何が出来てはならず、皆さんが出来るかではなく、皆さんが教会のために何が出来るかということを考えていただきたい。何が出来るかということの根本は、祈りです。仙台教区の

わたしたち一人ひとりが、祈りながら、助け合いながら進んでいきたい。そうしながら教区を作っていくことが出来ればと思っている」と挨拶した。議事に入り、司牧評議会の立ち上げについての審議が行われ、「仙台教区宣教司牧評議会」と名称を変更し、目的を明確に表す名称とすることになった。また代議員の任期を1年間延長することが決まった。次に、同評議会の役員選出が

行われ、司祭代表・小松史朗師、信徒代表・川井田 元氏(福島県) 伊藤 雄基氏(宮城県) 伊藤 宏子氏(岩手県) 里村 智彦氏(青森県) 修女連・Sr. 小針千代が選任された。午後に入って、「教区活性化研修会」の総括と評価が話し合われ、各県ごとに実施の様子と反省点などが報告された。今後の研修会開催については、今回の反省点を踏まえて、役員会で検討していくことになった。

・ 青少年のために継続して力を入れるということが大切だ。
・ 共同司牧のなかで信徒と司祭の関わりが低下している。司祭と信徒との温かい関わりによって社会に対して証しして欲しい。
・ 司祭の霊性と専門性を強化し信徒の霊性を高めるためにプランを作った。
・ 司祭の霊性と専門性を強化し信徒の霊性を高めるためにプランを作った。
最後に司教から、「今まではこうだったのでこうしなうではなく、状況が変わって来ているので、司祭も信徒も修道者も意識を変えて欲しい。この場、役員会、司祭評議会などの知恵を借りながら、遠くない未来にビジョンを作っていく」と思う。『光の子として暮らしている』という現実をはっきり意識しながら、主が喜んでくださることは何かという基準を作り、意識を変えて行く必要がある。」との話があった。

典礼の霊性を深める

石巻教会主任司祭 佐々木 博

奉仕の霊性

典礼という用語は、ギリシア語では元々「公共の仕事」、「公衆が行う奉仕」、または「公衆のための奉仕」を意味していました。また、新約聖書では、礼拝や祭儀、福音の告知、さらに愛の実践をも含む、まさに「神と人への奉仕」を意味する言葉であります(『カトリック教会の教え』173頁参照)。実は、この言葉自体が、まさに典礼の本質を示しています。なぜなら、典礼とは神と人とに仕える奉仕

の業だからであります。

この神と人とに仕えることの模範を示されたのは、勿論イエスご自身であります。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」(マルコ10・45)。ですから、最初のミサをささげられた時には、弟子たちの足を洗うことまでなされたのであります(ヨハネ13・1・15参照)。典礼はこのイエス・キリストの祭司職の行使に他なりません(『典礼憲章』7項)。ですから、典礼の霊性は、奉仕の霊性という本質を持つ

ていると言えます。したがって、私たちが典礼を行うときは、常に奉仕の心を持って実践しなければなりません。

また、典礼において特別な奉仕をになう時、「奉仕者」と呼ぶのであります。このように、典礼は教会の集会において実践する相互の奉仕であり、究極的には、まさに神に対する奉仕であります(『典礼奉仕への招き』21頁参照)。



・ 司祭が司祭に望むこと
・ 司祭が信徒に望むこと
・ 司教に望むこと
・ 司祭団としての共通理解と方針が欲しい。
・ 終身助祭制の活用を考えてもよいのではないかと。
・ 司祭と信徒の関わりを大事に。コミュニケーションを取っていききたい。
・ 冠婚葬祭には、司祭と信徒と一緒に対応して欲しい。
・ 信徒も奉仕するということへの意識を持ち、信徒の召命を意識して生活をして欲しい。

その後、「仙台教区人権を考える委員会」、「教区広報委員会」各県の「信徒連絡協議会」、「青少年司牧」についてそれぞれの活動内容が報告され、閉会の祈りを唱え、15時35分閉会した。

復活祭・受洗者の声

感動を胸に、光の子として・・・

今年の復活祭も、各地で多くの方々が洗礼の恵みにあずかった。

受洗の喜びをアンケートに答えていただく形で寄せていただいた。

【アンケート内容】 洗礼の動機(きっかけとなったこと) 洗礼を受けるにあたって影響を受けた人 洗礼を受けてから変わったこと これからの決意(敬称略・順不同) = 写真はカテドラルでの洗礼式 =

マリア・セシリア 湯澤 東子(ゆざわ としこ) 豊屋丁教会

義母の死にあたって、嫁ぎ先の宗教であるカトリックの葬儀で見送ったのを機に、教会のミサを数多く体験するうちに、聖書の教え、ことばに癒され、共感する自分があった。残る人生を、この教えの中で充実したものにしていきたいと思ったから。

湯澤ふく(義母)

洗礼を前に一年間勉強をしてきたが、その教えのすばらしさに(特に「愛」のとらえ方)ますます感動した。ライフワークとしてボランティア活動をしているが、その道にも相通じるものを感じます。

「ゆっくりでいいからね!」といわれた氏家神父様の言葉を支えに、少しずつ信徒としての道を歩んで行きたいと思っ



ています。よろしくお願い申し上げます。

マチア伊藤 智(いと ちさと) 一本杉教会

小さい頃から母に連れられミサにはあずかっていました。教会や洗礼については、知りたくてもそのチャンスがな

いまま、気づくと大学生になっていました。

大学1年生の頃に、シスターに「聖書勉強会があるんだけど参加してみない?」と誘われ、「何かわかるかも!」と思い参加してみることにしました。

それをきっかけにして、黙想会や青年活動にたまにはあります。参加する中で、今まで知らなかった部分をいろいろと経験することができました。ずっと決心がつかないままの日々が続きましたが、「支えてくれるみんながいる今が、洗礼を受けるチャンスだ」という思いが強くなり、洗礼を受けるに至りました。

溝部司教様 接して下さった、そして祈ってくださいました。神父様やシスターの皆様 一本杉教会の皆様 草津や松ヶ峰など、お世話になった教会の皆様 青年のみんなや子どもたち、そして家族

気持ちの面では「キリストを中心に据えよう」と思っているのですが、なかなか言動が伴わないでいます。

まず、洗礼のお祝いにいただいた本などを読みながら、信仰生活について考えていこうと思っております。

信仰をしつかりと見つめていこうと考えております。具体的には、少々目標は低いかもしれませんが、人のためにすることを優先して「ことにしました」。

そのためには、自分がやらなくてはいけないことを甘えなしに早め早めにやる必要があります。そうすることによって神様から与えられた時間を大事にすることに繋がれば良いな、と思っております。

ヨゼフ正木 幹雄(まさき みきお) 浪打教会

信者である妻と3年ほど前から一緒に教会に出かけているうちに、イエスに関心が高まり、また信者たちの温かい心に親しみを感ずるようになった。昨年妻の死によって、妻の希望でもあった受洗の意味が固まった。



正木とよ(妻)

受洗によって、イエスと結ばれることが出来た。愛の神ともいられると思うと、自分の身も心も豊になり、活力が溢れ出る。これまでの心の支え、生活信条、考えの視点が変わってきたようだ。

イエスの慈愛は、これまでの人生で接したことはない。恐らく人類の長い歴史の中でイエスのような人はいなかったと思う。受洗によって、そのイエスと結ばれ、愛の恵みを受け、そのことによって自らの愛をよびさまし、育て、真の信者として成長してゆきたい。

マリア・ヨハンナ郡 洋子(こおり ようこ) 元寺小路教会

私の信仰との出会いは20代の若く、悩み多き青春時代でした。20歳を過ぎて、結婚(次男へ)



子育て、実父の看病と看取りを終え、内なる自分ともう一度向き合いたいと思つたからです。絶望の病の中から、生きると言つことを教えてくれた亡き父。

とがめと回心で、式中は涙が止まりませんでした。額に聖水が注がれた時の驚き。今までの波立つた心は静まり、励ましと絶対



故立川建代(元高校校長)・戸田 道代母)、木村国基神父、聖ベルナデッタ、赤毛のアン

の安心感でみたまされて行くのはつきりと感じました。

司教様から、聖香油の塗油の後、「主の平和」と力強く両肩に手を置いて祝福いただきました。お優しいその目は、「あなたも光の子として歩みなさい」とおっしゃっているようでした。

塗油後、目の前がパツと明るくなり、内側の皮がはがれ光が入ってきたと感じた。あせり、迷いがなく、穏やかに祈り、自分の言動を思いおこす。また神のことをいつも思う。隣人愛ということばが常に頭をよぎる。

神様にしっかりとついてまいります。私は光の子！

あるがままの自分を受け入れ、また相手を受け入れ、許す気持ちが強まった。自分が何者であるか、何のために生きているのか、価値がないのではないか。苦悩の年月を過ごした。しかし、生きているのではない、生かされているのだと感じる。自分が、ではなく、神の行いに心をあわせられるようにしたい。まわりの人たちに目を向けて生きたい。

幼い頃から信じる神を求めていた。教会に関心があった。ミッシヨンスクールへ通い、聖書に触れ一層関心が高まりキリストに近づくようになった。病に伏し、もつろつとする中、救いを求めて教会に入って祈った。その頃、後に代母となつ

志家教会

て下さった方に出会い、ミサのほか聖書の勉強会へ通い始めた。ミサや教会での勉強の後は、いつも心が洗われたようにすがすがしくなった。求めていた私を神が導いて下さつたと思つている。

故立川建代(元高校校長)・戸田 道代母)、木村国基神父、聖ベルナデッタ、赤毛のアン

各地から

宮城 塩釜教会

新司教による堅信式

3月26日(日)、塩釜教会(主任司祭、アンドレ・ラシャペル師)で、マルチノ平賀徹夫司教様により堅信の秘跡が授けられた「写真」。受堅者は、13名(男7名・女6名)。



ミサ後、新司教様を囲んで、記念写真を撮り、受堅者と、新司教様の叙階を祝う会が行われた。平賀司教様は、20年前に当教会の主任司祭として、2年間在任しておられたこともあり、信徒一同今回の叙階は感慨深いものがあった。祝賀会では叙階式の話題になり、当教会出身の小松、木村両司祭が支える聖書の下で、祝福を受けられた司教様のお姿に感激を受けたことなど、時を忘れてなつかしくも楽しいひと

ときを過ごさせていたいただいた。(三島)

福島 原町教会

子どもの洗礼式と初聖体

4月16日の復活の主日に原町教会(主任司祭、ライモンド・ラトゥール師)で8歳の女子1人と、3歳と2歳の姉妹の女の子2人、合計3名の女子が洗礼式と、初聖体を受けました。8歳の女の子は、昨年受洗したお友達に後れをとってしまい、ずーっと受洗を希望して、神父様をお願いしておりました。教会では、信者のお母様に連れられて、ミサにあずかり、ミサ前の1時間程度、子ども会でお勉強も続けておりました。3歳と2歳の姉妹は、母親がフイリピン人で、両親が熱心に洗礼を希望されていました。当日は、2歳の子が、眠っていたところを起こされて、式に入つたので終始大泣きしたままで、神父様も失笑しながら洗礼を授けられました。(若原)



お礼の歌を歌う子ども達

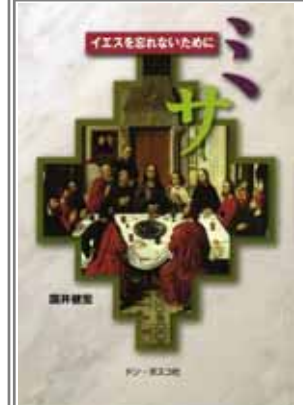
新刊案内

『ミサ イエスを忘れないために』

著者 国井健之(発行所 ドン・ボスコ社/定価650円+税)カトリック信者にとって、ミサはとても大切なものです。本紙読者の皆さまは、何度モ神父様から、また勉強会などで、ミサについてお話を聞かなくなつたことがあるでしょう。また、友人が教会に初めて来た時、その友人からミサについて色々質問を受けたことが誰しもあるのではないのでしょうか。毎日曜日、ミサに参加し、イエスをいただき、イエスに養われているのですが、いざ尋ねられると、その深い意味を伝えられなくて残念に思つてもしくはばばです。

そんな私たちに格好の手頃な本が、今回お勧めする本書です。ミサの歴史的事実から、ミサの典礼的意味、また、今私たちが参加しているミサの適切な説明なく、薄い本のなかに凝縮して書かれています。

著者の国井健之氏は、御受難会の司祭ですが、第2バチカン公会議で行われた典礼刷新を日本の教会に定着させるために尽力なさつた司祭のお一人で、現在も典礼委員会的重要なメンバーとして活躍中です。



活動紹介

NPO法人「萌友」

社会の隅で、小さくされて生きる、ホームレスの方々と共に
釜ヶ崎・寿町・山谷の地名を
言えば、日雇い労働者の生活する場、通称「寄せ場」と言われております。

バブル経済の崩壊、高齢化などの失業で、ホームレスの方々とたくさん生んでしまいました。それぞれの小教区で様々な支援の手を差し延べておられる事でしょう。

「寄せ場」の無い仙台にも 153

私の気分転換

青森地区担当司祭 小松 史朗

「落ち着きがない」「我慢が出来ない」「集中力がない」

「飽きっぽい」etc. これらの言葉は私の輝かしい歴史を

彩る大切な称号なのです。私

の子どもの頃を知る方々は、

たった1時間のミサでも、現

在、司式をしている姿を見れば

奇跡に思えるかもしれませ

ん。たった1時間のミサを我慢出来ずに、どれだけ神父さまに叱られたか…。 たかが45分の授業でも椅子に座つ

名（仙台市概数調査で実際は200名を超えていると思われる）の方々がホームレスとして公園・駅舎・道路などで孤独と不安の中に生活を強いられています。

カトリック正義と平和仙台協議会の炊き出し・夜回りを通して、彼らの強い要望が住所の確保・就労・体調の回復であることを知りました。これに応えるために、ボランティアの領域を越えて、2001年事業体「無料・低額宿泊施設」を作りました。当初個人運営でしたが、

2003年NPO法人「萌友」を申請、7名の理事によりカトリックが出来なくて、どれほど先生に叱られたか…。

さすがに、この頃は「落ち着きがない」と人から言われることはなくなりましたが、中身は子どものまま、我慢、集中力は未だに持っています。故に、一つのことに打ち込むことが出来ないのです。

こんな私でも10年も司祭を続けてきました。この辺で気分転換に休みがほしいと思いません。皆さま何と

かして下さい。



リック正義と平和仙台協議会と二人三脚の歩みを続けております。

現在、北山・長嶺の2棟のアパートに加え、柏木にもアパートをお借りすることが出来ました。居室20・談話室3・事務室1の規模で運営を行っております。

この施設で、それぞれの重荷を降ろしていただき、社会生活へと旅立った方々は80名を超えました。支援する者、支援される者、双方苦難の日々ではあります。笑顔に支えられて、明日を迎える喜びを送らせて頂いております。

（芳賀ヒロ子・連絡先

TEL 022 719-9117）

修道院紹介

シャルトル聖パウロ修道女会

紫山修道院

本会は、1696年、フランスの一寒村、ルヴェヴィル・ラ・シュノールでルイ・ショージェエ師のもとに集まった3人の若い娘たちによって始められました。当時の農村の子どもたちに教理と読み書きなどを教え、学校の姉妹と親しまれました。現在、世界30カ国で約4千人が働き、総本部はローマに移っております。

日本には、オズーフ司教様の招きによって1878年（明治11年）、3人のフランス人姉妹が函館に上陸し、貧しい人々の



ための診療所を開き、親のない子のための施設を作りました。仙台の創設は、1892年です。元寺小路教会のそばで、105年間活動してまいりましたが、幼・小・中・高と狭い敷地でひしめき合っていたので、1998年3月、紫山に全面移転しました。少し高台になっていてこの地は、見晴らしも良く、空気も水もおいしく、広々とした大自然の環境の中で、園児、児童、生徒が心身共に情緒豊かに育つよう励んでいます。

（Sr.中村 淳子）

復活祭受洗者県別人数（5月10日現在報告分）

福島県	宮城県	岩手県	青森県	県
2	4	0	1	男
8	25	1	1	女
10	29	1	2	計